

2019. 10. 30

No.215

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間1,500円)



住民の命を最優先の政治を望みます



10月某日 黄金色の北大のイチョウ並木

夫が入院して1カ月が過ぎました。そのため215号の発行が遅れました。申し訳ありません。

9月に台風15号、10月に19号と続き、記録的な豪雨で東日本12都県で50以上の河川で堤防が決壊して、大きな被害をもたらしました。復旧活動のさなかに、またもや21号の豪雨に言葉を失いました。昨年の9月には北海道地震があり、厚真町やむかわ町で土砂崩れや家屋の倒壊による大きな被害と、全域ブラックアウトを体験しました。深夜に江別も震度5の揺れ。今も恐怖がよみがえります。

普通に暮らしていた方たち、一人暮らしの高齢者、病気を抱えた人、ホームレスの人、言葉や生活習慣の違う外国人など、避難生活ができるだけ快適に過ごせるようにと願っています。

「これからの生活の見通しがたたない」と話していた方たちのお気持ちをお察しします。政府には住民の命を真剣に守る対策と予算を計画的に進めてもらいたいと切に望みます。

10月10日に植村裁判の控訴審が結審しました。原告の植村隆さんは最終意見陳述で「私は捏造記者ではありません。ファクトを伝えた記者が、「標的」になるような時代を一刻も早く終わらせて欲しい。裁判所は人権を守る司法機関であると信じております。司法による救済

を期待しています。札幌高裁におかれてはこれまでの証拠や新しい証拠を検討していただき、歴史の検証に耐える公正な判決を出していただきたいと願っております」と結びました。判決は来年2月6日です。詳細は<http://sasaerukai.blogspot.com/>をご覧ください

読者である宮下嶺生さんから毎月送られてくるキリバリから今の時勢を学んでいます。定例会での確かな論評が選ばれています。いくつか紹介させていただきます。(紙面の都合で抜粋の抜粋でごめんなさい)

中期症候に入った日本のファシズム化 加藤哲郎(政治学) 2019.9.15

◆「人権の軽視」 台風15号による千葉県や新島の被害は、深刻です。家屋や田畑が破壊され、電気が通せず、水道もエアコンも使えず、電話もスマホも不通。一人暮らしの老人に助けも届かず、孤独死が増えそうです。政府も千葉県も、当初対策本部さえ作りませんでした。台風後の首相や政治家の対応を追うと、この国の政治が、いかに人命と人権をおろそかにし、老人やこどものくらしに無関心であったかがわかります。◆「マスメディアのコントロール」 排外ナショナリズム高揚＝嫌韓世論づくりを演出したのは、内閣府と首相官邸でした。この夏の日本における韓国パッシング報道は、戦時大本営発表にいたる内務省・司法省の思想統制を想起させる、新聞雑誌・テレビ・インターネット総動員体制でした。◆「身びいきの横行と腐敗」

今年は秋の神道儀礼を含む「宗教と政治の癒着」が続き、「学問と芸術の軽視」「強情なナショナリズム」が、来年のオリンピックに向けて、いっそう強まりそうです。そればかりではありません。新内閣の第一の役割は、当面の災害対策でも、世論の求める景気回復や社会政策でもなく、世論調査ではほとんど期待のない「改憲」だと、「裸の王様」は公言しています。いま香港の自由を求める人々は、「願栄光帰香港(香港に再び栄光あれ)」という歌で、抵抗を続けています。you tu

be にありますが、格調高いプロテスト・ソングです。ファシズムに抗するには、反ファシズムの文化と運動が必要です。

ホルムズ海峡への自衛隊派遣 改憲達成のための「切り札」に！ LITERA 2019.10.18

安倍首相は午後の国家安全保障会議（NSC）で、自衛隊派遣の具体的検討を指示した。/速報後に行われた菅義偉官房長官の会見によれば、派遣が検討しているのは中東のオマーン沖やアラビア海北部など。ホルムズ海峡という言葉はあえて避けたが、地理的につながっており、まさに目と鼻の先だ/自衛隊派遣は「日本独自の取り組み」と位置付けるといふ。「中東における緊張緩和と情勢の安定化」「中東地域の平和と安定および我が国に關係する船舶の安全の確保」を理由に挙げ、さらに「情報収集体制の強化を目的」とし、「防衛省設置法に基づいた調査および研究」として実施すると表明。/しかし、騙されてはいけない。/だいたい、いくら安倍政権が隠そうとしても、ホルムズ海峡周辺で日本の自衛隊が哨戒をすれば、イランからは敵対行動に映る。自衛隊機による偵察が得た情報を米国側に差し出すことは“公然の秘密”であり、それは米軍と一体化した“軍事行動”に他ならないからだ。

漂流キャスター日誌 金平茂紀（TBS報道局） 論座 抜粋

★9月10日(火) 午後、韓国情勢の勉強会。夕刻から浅井基文氏の講演会に参加。徴用工問題が1965年の請求権協定ですべて解決済みという日本政府の主張が、国際法上いかに根拠を欠くものであるか。1978年に日本が署名した「国際人権規約B」について、当時、外務省において当事者の一人だった浅井氏の政府主張への論駁は非常に説得力があり、目から鱗が落ちる思い。なぜ浅井氏のような明晰な主張が紹介されないのだろうか。[内閣改造] それにしても加計学園疑惑の渦中にいた萩生田氏を文科大臣に据えるとは、露骨を通り過ぎて、今や焦土と化した文科省に凱旋させるような感じか。それにしても改造内閣の顔ぶれがひどすぎないか。側近重用と「滞貨」一掃。ウルトラ右派の顔ぶれ。目くらましの進次郎氏。

★9月19日(木) [福島事故 東電旧経営陣に対する東京地裁判決] 13時17分すぎ、裁判所前にいた告訴告発団、支援者グループに廷内から第一報が入った。「被告人全員無罪！」。ええっ？ 人々から落胆のため息と強い怒りの声があがった。短くりレポートをする。僕は告訴人たちの顔をじっと観察していた。年齢はまだ若いのだろうが、髪が白髪だらけになっている女性は、一体何が起きたのかが理解できないかのように茫然自失の表情だった。だがしばらくして涙が頬を伝っていた。/告訴告発団の人々が次々に怒りと抗議のスピーチをしていた。「本当にこの日に真実と正義が実現されるように願っていたが、力は小さいが、これからまた闘いが始まると思っています」「腐った司法、腐っ

た世界を直しましょう」「裁判所は、何をみてこの判決文を出したのか、納得できない。家を追われ、故郷を追われた。裁判官よ、あなたが経験してみろ」……。4時27分から法廷内に入った。永渕健一裁判長がすごく早口で判決文を読み上げていた。事務的に読み上げている感じ。向かって左隣に男性の陪席裁判官。右隣にまだ若そうな女性の陪席裁判官。この若い女性裁判官は合議で何を発言したのだろうか。20分ほど聴いていたが、いったん法廷を出て、判決要旨に目を通す。一言で言えば、門前払いに近いような判決内容である。



浦臼のブドウ畑（2017年11月撮影）

19号台風の災禍と「2020年東京オリンピック」 鈴木耕（ジャーナリスト） 2019.10.16 マガジン9

関東地方から台風が遠ざかった13日の午後、ぼくは多摩川へ行ってみた。凄まじい濁流がまだ渦を巻いていた。実際に目の当たりにすると、恐怖感が湧く。(中略) テレビに映し出される災害規模の異常さは、やはり気候温暖化の影響と考えなければ説明がつかない。/本気のバカどもが、温暖化阻止を国連で訴えた少女グレタさんに、「異常気象ではなく異常性格」とか「左翼に踊らされているバカな少女」などと罵声を浴びせる。バカは日本だけじゃなく世界中にいるらしい。そんなバカどもをも巻き込んで、東日本ほぼ全域を襲った大洪水。国土が壊れていく。/「国破れて山河あり」という。だが最近の自然災害を見ていると「山河破れて貧困政治あり」ではないかと思えてくる。/もし、来年の東京オリンピック時に同様の災害が起きたら、日本は世界に「この国は終わった！」と知らしめることになるだろう。それほど、安倍内閣の災害対応はひどすぎたのだ。そこへ輪をかけたのが、老害としか言いようのない二階自民党幹事長の発言だ。朝日新聞(14日付)にこうある。/台風19号の被害を受けて開いた党の緊急役員会のあいさつで、「予測されて色々言われていたことから比べると、ますます収まったという感じだ」と語った。会合後、記者団に「日本が引っくり返されるような災害、そういうことに比べればという意味だ」と釈明。

報道の自由を取り戻そう 韓国の闘いから学ぶ

シンポジウム「いまこそ『報道の自由』を我が手に！」が10月11日午後、札幌市教育文化会館で開かれ、前日の植村裁判札幌控訴審の傍聴に来日した韓国の支援団体「植村隆を考える会」の2氏が、1980年代全斗煥軍事独裁政権下の言論統制・言論操縦との闘いと、現在の活動を語りました。



写真・韓国の支援団体「植村隆を考える会」のみなさん（10.10植村裁判報告会で）

暴露された軍事独裁政権の「報道指針」



慎洪範（シン・ホンポム＝79 写真・左）さんは元朝鮮日報記者。1986年9月、政権が各新聞社に示してきた日々の秘密通信文「報道指針」を、民主言論運動協議会が機関紙特集号で暴露した。あったことをなかったことに、重要な事を些少なこと、たいしたことではない事をたいしたこととして報道するよう指示する内容。これは1面トップに、あれは見出し1段で扱えと、記事の位置、扱いの大きさまで強要していた。

慎さんは、言論の自由を求め解職された元記者たちが作る同協議会の、執行委員だった。国家機密漏洩罪、国家冒涇罪などで他の2人とともに逮捕された。

「韓国の国民は軍事独裁政権の下で、言論の暗黒時代を過ごしてきたが、その中でも全斗煥政権は、軍と警察、言論統制という2つの柱で成り立つ政権だった。民主化運動、人権運動、労働運動など政権に不利な報道を禁止し、大統領などの動きは、大きく報道するように指示した。韓国の新聞6紙は同じような内容になってしまっていた」

慎さんは具体例を挙げる。▼野党指導者が外国通信社の取材に応じた内容は報道するな▼金大中に関する記事は小さく扱い写真は載せるな▼国会議長の発言「政府は、国会議員の尾行・盗聴・張り込みなどをやめよ」は報道するな▼（宗教界や民衆運動団体、野党が共同で作った）拷問対策委員会のことは一切報道するな▼大統領の外国訪問はトップ記事で扱え、等々。

85年10月19日から86年8月8日まで10カ月間の「報道指針」は、688件にのぼる。

「我々は国内のニュースを、岩波書店の『韓国からの通信』など、外国の報道で知る状態だった。韓国日報の金周彦（キム・ジュオン）記者は、指針が届くたびにメモしていたが、韓国の言論が権力の広報機関に成り下がるという危

機に絶望し、この資料を世に知らせることが自分の義務だと思った。またそれがどれほど危険な事かも知っていた」

資料を入手した同協議会は、86年9月9日、言論統制・言論操縦の実態を暴露した。機関紙特集号2万2千部の爆発力、破壊力はすさまじかった。「本当にありえることなのか」「だからすべての新聞が同じ内容だったんだ」「こんな報道をしていてメディアとはいえない」「政府が新聞を編集していたのも同然だ」。驚きと怒りが一気に広がっていった。

年明けの87年1月、3人は起訴された。弁護団は「金大中の写真が国家機密になるのか?」「世界の報道機関、通信社が報道し、韓国民だけが知らないニュースが国家機密か?」「言論を権力の広報誌に墮落させ、反文明国にしようとする政府こそ、国の名誉を傷つけ冒涇している」と反論。一審では有罪となったが、事件は翌年の民主化運動の導火線となったと言われる。

慎さんはその後、市民が出資して88年に創刊した、ハンギョレ新聞で論説主幹を務めた。「言論は良心と理性、知性によってのみ真実と正義を実現することができる。あのような指針は今はないが、経営幹部らの指示、広告主の意向という力が働いている」と強調した。

「いま壁が築かれている韓国と日本の間に、植村さんは橋を架けようとしている。この橋を渡って私たちが交流と連帯を深め、理解しあえればと願っています」

市民が監視し、市民に表彰される韓国メディア

金彦卿（キム・オンギョン＝51 写真・右）さんは、元記者たちが作った民主言論運動協議会から引き継がれて、多くの市民が加わってメディア監視などを続ける民主言論市民連合の事務局長。これまで数々の不正が行われてきた大統領選挙、国会議員選挙など選挙監視は、特に力を入れてきた取り組みだという。市民講座「言論学校」を作り、参加する市民を、日々の報道内容をチェックするモニターに育ててきた。



批判するだけでなく、すぐれた報道を毎月選考して公表。年末には最優秀報道を「王の中の王」として表彰してきた。各メディアからその受賞を目指される存在になっているという。保守系新聞社に放送免許が与えられて誕生した、テレビ局の問題がある放送は市民連合が開いているフォーラムで取り上げ、「報道通信審議委員会」に問題提起している。

「会員約5千人の毎月千円の会費で、すべての活動費がまかなわれています。地道に活動を続けてきた会は、年末に35周年を迎えます」と金さん。NGO「国境なき記者団」による2019年度報道の自由度ランキングでは180カ国・地域の中で韓国は41位、日本は67位だった。

（日本ジャーナリスト会議・林秀起）

本 BOOKS



ぼくはイエローでホワイトで、
ちょっとブルー

プレイディミカ著 新潮社
1, 485円

英国で保育士として働きながら、格差社会の現実を伝えてきたライターのプレイディミカさんの新刊。

アイルランド人の夫との間に生まれた中学生のひとり息子が、学校生活を見つめた現在進行形のノンフィクションです。優等生の息子が通い始めたのは、「元・底辺中学校」でした。毎日が事件の連続。人種差別、貧困、ジェンダーといった難問と格闘し、悩みながら前向きに成長していく姿が等身大で描かれ、時々、クスッとしながら引き込まれました。「多様性は、うんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすからいいことなんだと母ちゃんは思う」と著者は語ります。小柄な息子が無事にやっていけるのか。両親は秘かに「大丈夫だろうか」と案じますが、息子はトラブルや疑問に正面から向き合い、意外なたくましさを発揮するのです。様々な事情を抱えた子どもたちが繰り広げる人間ドラマは、ケン・ローチ監督の映画の世界を見ているようで、しかもユーモアもたっぷり。これが現実なのかと、驚いたり、感動したりの連続です。

「エンパシーとは何か」という教師の設問に、息子は「自分で誰かの靴を履いてみる」と回答します。「他人の立場になって考える」を意味する英語の慣用表現です。

「エンパシーはシンパシーと同様に『共感』と訳されることが多い言葉で、英国人でも意味を混同して使いがち。でも、シンパシーは自分の仲間や似たような考えの持ち主や、かわいそうな人に共感する感情のこと。一方、エンパシーは自分が賛同しない人に対しても、相手の立場ならどう思うだろうと想像してみる能力」と説明します。こんな授業をするなんて素敵ですね。母は「エンパシーって、すごくタイムリーでいい質問だね。いま、英国に住んでいる人たちにとって、いや世界中の人たちにとって、それは切実な大切な問題になってきていると思うから」と息子に語る場面が素敵です。社会とリンクさせて学ぶ教育に感心しました。大人社会を反映した子ども世界は、日本も同じだと思いました。EU離脱派と残留派、移民と英国人、様々なレイヤーの移民どうし、階級の上下、貧富の差、高齢者と若年層など、ありとあらゆる分断と対立が深刻化している英国で、11歳の子どもたちがエンパシーについて学んでいるというのは、特筆に値すると著者は述べています。英国での話ではあるけれど、「日本はどうなの」と問いかけられたように思いました。日々の体験から考え行動する母と息子から、教えられることが多かったです。お勧めです。



アイヌ、日本人、その世界

小坂洋右著 藤田印刷エクセレントブックス 2, 376円

著者の小坂洋右さんはアイヌ民族博物館の学芸員をへて、現在、北海道新聞の編集委員をさ

れています。

本書は、アイヌ民族と日本人の精神世界の違いに分け入り、双方の関係史などを記録や証言、口伝の伝承をもとに俯瞰する第一部「人々は聴き 大地は見てきた」と、北海道を中心に国内外の各地を巡り、現代を生きるアイヌ民族との出会いをルポルタージュ風にまとめた第二部「世界は変わった でも、生きていく」の二部構成で展開します。知里幸恵が「アイヌ神謡集」で伝えたかったこと、松浦武四郎が蝦夷地で出会った人々、カムイと心を通わせることの豊かさやエカシ（長老）たちの訴えなども伝えます。

書名に「日本人」を入れた理由を「アイヌ民族が文化や暮らしを奪われていった一方で日本人（和人）の側にも失ったものがあったのではないかと述べています。知里幸恵は日記に「私がシサムだったら、もっと潤いのない人間だったかも」と書きました。

小坂さんは30年以上前、アラスカで1カ月以上にわたる考古学・人類学調査に参加しましたが、そのアラスカにも同様に人間の娘がクマと結婚する物語があって驚いたとあります。なぜ、遠い北米にも類似の物語があるのでしょうか。それはどちらも、自然が豊かで伝統的にその恵みで人々が暮らし続けてきたからです。その一節「『私はもうすぐ死ぬだろう。おまえは人間の村に戻って、二つの世界をつなぐために、クマのクラン（家系）をつくるのだ』（略）これはクマの一族と人間の一族が緊密につながっていることを確認する物語である。アイヌ民族だけでなく、世界各地の先住民族は、国家に征服されて自然とのつながりも見失われた。小坂さんは「現代社会が失ったものを映し出す『鏡』となるものは何か。その一つが先住民族の社会であることは間違いないだろう。（略）クマを持たない小規模なコミュニティを持続させる選択をしてきたことに、もっと目が向けられるべきだ」と述べています。私もアイヌ語を学びたいと思いました。

苛酷な抑圧と差別、同化政策によって発信力を奪われてきたアイヌ民族。しかしその精神文化、世界観には、現代を生きる日本人が失い、道を誤る原因のひとつとなった「自然への恐れ」が息づいています。

アイヌ民族の文化や歴史について英語で紹介する本がほとんど見当たらないので、英語版を併せてあり、とりわけ、北海道の豊かな自然の中で培われてきた独自の文化は、国内ばかりでなく、海外の人たちにもきっと感銘を与えたいと思います。



『この世界の片隅』を生きる ～広島の人たち～

堀和恵著 郁朋社 1,620円

作家の山代巴さん、大田洋子さん、漫画家のこの史代さん、映画『原爆の子』に出演した早志

百合子さん、祖父母を被爆者に持ち未来への語り手となった保田麻友さん。5人の女性の人生を5つの章で紐解いていきます。著者は『評伝菅野須賀子 一火のように生きて一』を書いた堀和恵さん。

こうの、原爆は描いたが「戦争を描いた」という意識はなく、自分のやり方で「戦争」を描こうと思い、『この世界の片隅に』を2006年から描き始め、2008年に完結します。先人の多くの資料や文献を丹念に追いながら、なお自分らしい筆致で描き切ったことが評価されました。そのいきさつを堀さんはいきいきと伝えています。

2016年にアニメ映画『この世界の片隅に』が公開され大ヒットしました。戦時中の庶民の日常生活と懸命に生きる人々の姿が描かれていました。

山代は「この世界の片隅で」を1965年に出版し、哲学者の久野収は「戦争の20年後におくられる最も大きな記念碑である。戦後のゆがみの大きさを事実によってこれほど深く指摘した記録は、絶無だといってよい」と評しました。太田には「夕凧の街と人」と「桜の国」という作品があります。「桜の国」は懸賞小説に応募して一等当選を果たし、作家としての地位を築きます。「夕凧の街と・・・」はルポルタージュの形式で書かれ、原爆、放射能という強力な科学力に全身全霊で立ち向かったと堀さんは書きます。

二人の影響を受けたのがこうのでしたが、作品は全く違います。堀さんは「現代に多くの共感を呼んだこうの、『この世界の片隅』に、と視点が移動することで広島だけではない、そして原爆の被害者だけではない、より多くの読者の共感を生む『普遍性』を持ち得たのではないだろうか」と書きます。私も同感です。映画からは戦時中の庶民の暮らしがどんなであったかが見事に伝わってきました。原作者のこうのは「それぞれの人のところに、それぞれの熱で届く」作品を書いたと語っています。

平易に書かれていますので、是非若い人にも読んでいただきたいです。



愛のまなざし 三浦綾子の舞台を旅する

石井一弘著 中西出版 1,320円

雑誌に連載した50回をまとめたのが本書です。

国内はもとより、遠くサハラ

の舞台も紹介。三浦文学27編のゆかりの地の写真108点と、文章を寄せました。

その写真展があり行ってきました。「三浦綾子さんが見て、表現した景色から、三浦作品を感じてほしい」という石井さんの思いが伝わってきました。

私が三浦文学と初めて出会ったのは、15歳の時でした。「氷点」は新聞小説に初めてはまった作品でした。毎朝、欠かさず読んでから登校した日々を思い出します。当時、見本林に神秘的なイメージを描いていました。思いがけなく旭川で職を得て10年暮らしました。一番最初に行ったのは見本林でした。美瑛川流域の雪原が懐かしい。「続 氷点」の舞台に選んだのは網走の流水でした。2007年、同行していた夫の光世さんが「このホテルの窓から、綾子と一緒に流水の中を奔る赤い光を見た」と証言。石井さん夫婦が新婚旅行で泊まったホテルでした。三浦文学の写真を撮ることが運命づけられていたかのようです。「流水原に落ちる夕日」の写真が見事です。

私が特に好きな写真は表紙にも使われた「嵐吹く時も」です。写真説明に「苫前は浜辺の集落と山の手の市街地からなっている。それをつなぐのがこの坂道で市街地には学校や役場があった」とあります。小学1年の半年だけ暮らした積丹郡の美国町を思い出すからかもしれません。石井さんの文章は簡潔で、物語の把握が的確です。写真も単なる風景ではなく、心情に訴えかけるものがあります。これだと思える瞬間を捉える写真の力って素晴らしいですね。

植村裁判の写真も担当。私の銀河通信200号祝賀会でもお世話になりました。

奴隷貿易の旅

上幸雄著 歴史の旅クラブ発行 2,000円+送料200円

上幸雄さんは、長く環境・公害問題専門誌の編集や、自然保護運動に関わり、NPO法人日



本トイレ研究会の代表理事を務めています。日本山岳会の会員で、山のトイレ問題で、幌尻岳山荘で、私もお話を聞いたことがあります。

上さんが「奴隷貿易」に関心を持ったのは1968年、早稲田大学の探検部の4人の仲間と共に1年近くアフリカ探検旅行に行ったのがきっかけでした。ナイル河を源流から地中海までボートで下るといって壮大な計画でした。探検成功のために、アフリカの地形、気象、植生、民族、文化、歴史、治安、病気、政治情勢等。さまざまな情報を収集しなければなりませんでした。

帰国してからアフリカへの関心が深まったと上さんは言います。本書では、奴隷貿易の歴史をたどりつつ現代社会とのつながりについて検証しています。旅は2019年3月まで、実に14回に及びます。たくさんの資料や本にもあ

たっていますが、やはり、一番の読みどころは、旅で見聞した奴隷貿易の痕跡の数々です。リヴァプールとブリストルの項では、奴隷制ミュージアムが設置されていて、奴隷貿易の事実を自国民の子どもたちや若者、外国人に伝えようとしていると書きます。

日本は教育現場で、戦争の非道を伝えていません。奴隷貿易がその後の全世界を大きく変えたことは明らかでした。ヨーロッパとアフリカ、アメリカだけではありません。奴隷貿易と奴隷制は、国際政治、南北問題、食糧・資源問題、アフリカでの内戦という国際問題を考えたとき、その根底には奴隷貿易が作り上げた重い歴史が横たわっていると上さんは指摘します（右上に続く）

日本が戦前、中国大陸や朝鮮半島で行った「中国人強制連行」「朝鮮人強制連行」はヨーロッパ人が15世紀から19世紀に行った奴隷貿易と規模は違っても多くの点で共通しています。奴隷貿易は遠い昔の歴史的事柄ではなく、現代世界と深くつながっているのです。本書は「大西洋三角貿易」の一辺だけ。続編にも意欲を燃やしています。

私は映画と小説に描かれる奴隷しか知りませんでした。示唆に富む本です。

問い合わせや本の申し込みは、上幸雄さん ue-koo@ye4.fiberbit.net TEL 090-7904-9096 へお願いします。送料を含めて2,200円です。

Cinema Graffiti <私の映画評> シネマグラフィティ

子どもらの愛される権利を問う

『存在のない子供たち』

(ネタバレあり)
樋口 みな子

札幌映画
サークル
シネアス
ト10月号
掲載



子どもたちにショックを受けて、何もしいではいられたなかった」と映画化を決意し、3

(C) 2018 Mooz Films / (C) Fares Sokhon

最近読んだ本「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」はイギリスの元底辺公立中学校に通う少年と家族の話です。11歳で入学して最初の試験で「子どもの権利を三つ挙げよ」という問いが出され、アイルランド人の父と日本人の母から生まれた少年は「教育を受ける権利、保護される権利、声を聞いてもらえる権利。まだほかにもあるよ。遊ぶ権利とか、経済的に搾取されない権利とか・・・」という答えに目からうろこが落ちるほど感心させられました。問いそのものも素晴らしいですね。

親の虐待を受けて育った少年ゼインは推定12歳ですが、体は小さく8歳くらいにしか見えません。物語はゼインが「僕を生んだ罪」で両親を訴えるところから始まります。

舞台はレバノンの貧民街。両親にはまともな仕事がないうえに、子だくさんで、ゼインは学校にも行けずに、路上で物売りをしながら家計を助けています。ゼインは子どもの権利を全く保証されていないのです。ゼインは一つ違いの妹を大事にしている、彼女の汚れた下着を洗う理由が分かった時には、やるせなさを覚えました。妹を雑貨屋の大家と結婚させることを知り、ゼインは怒り、助けられないと知って家出してしまいます。ゼインは遊園地で働いていたエチオピアからきたラヒルに助けられます。条件は1歳のヨナスの子守りでした。まるで兄弟のように世話をやくゼインの優しさに心がほぐれます。しかし、そんな小さな幸せは長くは続かず、ラヒルは、不法移民者として逮捕されてしまいます。そんな事情を知らないゼインは、ヨナスを小さな荷台に乗せて、食べ物を捜し歩きます。出生届けが出されていないゼインは誰からも人間として認めてもらえないのです。

降りかかる困難に立ち向かっていくゼインの姿は、彼に扮したゼイン・アル・ラフィーアの体験と重なります。彼はシリア難民として家族でレバノンへ逃れたものの、学校になじめず10歳からアルバイトで家計を助けていました。ナディーン・ラバキー監督は「路上で、物売りや物乞いする

年間リサーチしたと語っています。ゼインを含めたキャストのほとんどが物語とよく似た境遇で暮らす人々です。そういう出演者と一緒に考えながら制作されたこの作品は、彼らの訴えや涙、貧困の実態を抉り出し、まるでドキュメンタリーのようなものでした。

ゼインが不安に揺れ、心の底では愛を渴望するまなざしが胸を突きます。監督の直球の訴えに心が揺さぶられました

はにかんだゼインの笑顔がこれからの人生に光を予感させるラスト。「よく生きてきたね」とゼインが愛おしく思いましたその後どんな人生を歩んでいるのか今も気になっています。

残念ながら、この種の映画がシネマフロンティアで上映されていたことを知らない人が多く、小さな劇場で出会ったのは映画サークルの人ばかりでした。

軍隊は住民を守らない

『沖縄スパイ戦史』

樋口 みな子

札幌映画サークル
シネアスト
11月号掲載



戦後70年以上語られなかった沖縄戦での陸軍中野学校の「秘密戦」とは何だったのか。

知られざる少年ゲリラ兵、軍命による強制移住とマラリア地獄、スパイ虐殺。沖縄戦は今と地続きでした。三上智恵監督と大矢英代監督が力を合わせ、沖縄戦の闇を克明に描いた渾身のドキュメンタリーです。

まだ10代半ばの少年たちを利用して「護郷隊」として組織し、秘密戦のスキルを仕込んだのが中野学校のエリート青年将校たちでした。彼らは国体護持を優先し、米軍の交通を遮断するため中北部の橋のほとんどを爆破しますが、結果としてそれが北部へ避難しようとした住民たちの大量の餓死を招くのです。

また彼らは、古くからマラリアの有病地帯と知られていた西表島に、波照間などの住民を隔離するという残酷な行為を平然と行いました。それにより、波照間には米軍が上陸せず死者は一人もいなかったにも関わらず、島民の3分の1である約500人が命を落としたのです。住民が住民を監視しあい、スパイと疑われた人を密告し合い処刑された人たちも数多くあったという、あまりにもおぞましい史実に胸がつぶれました。

第二次世界大戦末期、米軍が上陸し、民間人を含む24万人余りが死亡した沖縄戦。私が知っているのは南部の沖縄戦でした。三上さんのシネマトークにも出てきた「観光ガイドにない沖縄」という本を読み、家族で沖縄の戦跡を訪ねたのは1990年のこと。眼下の海には見渡すかぎり無数のアメリカの艦船が上陸したという慶良間諸島を見に行き、120人も住民が集団自決した読谷村のチビチリガマにも入ってみました。現在は見学できないようですが、当時は日常使われていた食器や自決の悲惨さを物語る遺骨もあったように記憶しています。日本軍の強制であったことは明らかです。



軍は住民を守らない。住民を利用する。少年もその家族も利用する。軍の秘密が知られて、裏切られるのを怖れるからです。軍へ協力するため、海軍が造った巨大な集積庫でたった一日作業をしたくさんの魚雷を見てしまった18歳の米ちゃんが、軍事機密を知っているという理由でスパイリストに載せられていたというのも怖ろしい。

護郷隊の二人、村上治夫中尉と岩波寿中尉は、戦後、戦死したすべての部下の家を訪ねては、慰霊、遺族の就職の世話などをしました。良心の呵責を感じていたことはわかりますが、免罪するわけにはいかないと思います。三上監督はその両面を描いていました。

一方、波照間島から西表島へ強制移住を行い、多くの島民を病死させた山下虎雄（本名酒井）は「上部の命令だから」と一片の反省もなく、電話の向こうで笑いながら応じた姿が許せません。教員時代、ユーモアもあり、子どもたちに慕われたという証言がぐさりと胸に刺さります。

少年兵の良光さんは、爆破隊に選ばれ何度も死を覚悟しましたが、生き残って30年間もPTSDで苦しみました。今は心の平穏を取り戻し、死んだ戦友の数だけのカンヒザクラを植え続け、平和を祈る姿が印象的でした。

沖縄戦がどういうものだったのかを知ると、宮古島や石垣島での自衛隊のミサイル部隊の配備が進んでいることが、どんな事態を招くのか。なぜ沖縄の人々が辺野古への新基地建設に身を挺してまで反対するのか。沖縄だけの問題ではない。私

たちの問題だと強く訴えかけます。日本軍の本質は、自衛隊に引き継がれているのです。集団的自衛権も特定秘密保護法も通ってしまい、今はまるで戦前に戻ったかのようです。さらに憲法改正を政府は積極的に進めています。真っ先に犠牲になるのは国民です。沖縄戦で苦しめられた、沖縄の人たちの思いを引き継がなければならない。沈黙してはいけません。久しぶりにジャーナリズム魂が溢れた作品で、監督の伝えたい思いが胸にずしんと響きました。

上映会には500人以上が鑑賞。

(C) 2018「沖縄スパイ戦史」製作委員会

抗い

西嶋真司監督

林えいだいさんは九州・筑豊を根拠地に、歴



史に埋もれた事実を掘り起こしすぐれたルポルタージュを世に送り出した記録作家です。福岡県に生まれ、反権力、反戦、反差別を貫き、2017年9月、84歳で没しました。

本作はがんと闘う晩年のえいだいさんへのインタビュー映像を通して、反骨の魂の軌跡をたどり、ジャーナリズムは戦争、公害、差別とどう向き合ったのか、という重い問いを突きつけます。監督は現在、植村隆さんの闘いの日々を記録する映画「標的」を制作中の映像作家西嶋真司さんです。

えいだいさんの父寅治さんは神主でした。過酷な労働と差別を受けて炭鉱から脱走した朝鮮人坑夫を自宅に匿い、警察の拷問が原因で命を失いました。「国賊」「非国民」とさげすまれても、朝鮮人の尊厳を守り抜き、屈しなかった父の姿が、えいだいさんの原点でした。

1945年5月に福岡で起きたという特攻機の放火事件。通信士が犯人とされ銃殺されました。えいだいさんはこの青年が朝鮮人であるために無実の罪をきせられたのではないかと真相に迫ります。放火のあった前日、出撃に向けて一緒に杯を交わしていた仲間がいました。その一人が「彼はやっていない。私の証言を聞いてくれれば彼は無実になっていたはずだ」という証言を引き出します。

筑豊の炭鉱では、懸命に生きた人々、坑夫や港湾の荷役作業などで働く朝鮮の女性たちの姿も生き生きと写されていました。女坑夫の映像に、スガイ・ディノス閉館前に観た「作兵衛さんと日本を掘る」をふと思い出しました。がんと闘いながら、指にセロテープを巻き付けて最期まで書き続ける姿に、闘病中の夫に観てもらいたいと思うほど励まされました。「歴史の教訓に学ばない民族は結局は自滅の道を歩むしかない」えいだいさんが、生涯をかけて訴えてきたことを私たちは引きついでいるだろうか？と問われたように思いました。

米軍が最も恐れた男 カメジロー
不屈の生涯



佐古忠彦監督

2017年に公開された「米軍が最も恐れた男 その名はカメジロー」から2年。鑑賞した多数の人々から「家庭でのカ

メジローを知りたい」「どうして、こんなに不屈の精神に至ったのか」という感想が寄せられたそうです。佐古忠彦監督は、230冊の瀬長亀次郎の日記を丹念に読み込み、家族との日常や、政治家、夫、父親などとしての素顔を紹介。不屈の精神の根底にあるものを浮かび上がらせます。さらに毒ガス移送問題やコザ騒動、沖縄と核など、沖縄返還へ向けて進んでいく闘いが描かれます。日記には「大地にしっかりと根をおろしたガジュマルはどんな嵐にさらされてもびくともしない」という言葉も残されていました。

刑務所で妻、文さんからの手紙を受け取ったカメジローは日記にこう書きました。「ぼくのタイ捕投獄以来、こちらの世話、気苦労、犠牲者家族に対する世話などで大変だろう。想像に絶するものがあるだろうがあと19ヶ月だ。頑張れよ文。5回よみかえしよんだ。あきないものだ」優しさがあふれて、家庭の中でも民主主義を貫いた人だと知りました。役所広司の語りがかメジローの強さの中に優しさも伝えていました。

前作でも描かれていましたが、1971年、当時の佐藤栄作首相との国会での論戦は見ごたえがあり、両者の政治家としての矜持が伝わってきます。今の政治のありようとは雲泥の差です。その2年後に沖縄は返還されました。

「この沖縄の大地は、再び戦場となることを拒否する！基地となることは拒否する」のかメジローの言葉は、今の沖縄の闘いにつながり、私たち一人ひとりに、黙ってはいけません。戦争への道を許してはならないと訴えかけて、とても励まされました。前作に続いて今回も坂本龍一の作曲、演奏が素晴らしい。

佐古監督は「その魂の言葉を生み出した原点も日記に残されていた。亀次郎は、何のためにこれほど不屈に一本の道を歩み続けたのか。その先に何があったのか。沖縄の歴史と亀次郎の言葉が、その答えを導き出す。そして、それは、後世へのメッセージとなって語りかけてくる」とコメントしています。

私も今、逆境にあります。カメジローの名言「苦しい時にはよく方向を見失う。突然暗がり投げ込まれると、その瞬間も見えないようになるがしばらくじっと腰を据えておれば、次第に心眼は開かれ、必ず、突破口をみつけることができる」が心に響きました。

沖縄に行ったら那覇市のカメジローさんの資料が展示されている「不屈館」に行ってみよう。

シアターキノで、ロングラン上映が続いています。(前作は2017.12.5銀河通信204号をご覧ください)

『ぼけますから、よろしく願います。』
上映会に1400人！



写真・監督の信友直子さんと

9月1日(日)、札幌プラザ2・5での「ぼけますから、よろしく願います。」は異例づくめでした。なんと朝から夕方まで3回の上映で約1400

人が詰めかけました。狸小路5丁目一帯は長蛇の列。小樽からいらした方も。私はこんな光景をはじめて見ました。

認知症の87歳の母、家事をしたことのない95歳の父は懸命に支えます。一人娘の信友直子さんがカメラを回し、記録したドキュメンタリー映画です。泣きながら撮影したことも。

信友監督のトークで「カメラを通すと、一歩引き客観的になれた」「家事をしたことのない寡黙な父が、かいがいしく、妻の面倒をみるいい男だとは想像したこともなかった。いまでは父とは何でも話し合う間がらになった」「両親が当たり前前に存在し、愛してくれるありがたさにも気が付きました」などと語りました。ありのままを受け入れ、夫婦が連れ添って生きていく姿は、愛おしさが溢れて胸がいっぱいになりました。老いてもこんな夫婦になれたらいいな。主催はシネマー馬力で札幌映画サークルも全面協力しました。私はパンフレット売りを担当して90冊を完売しました。

当初、会場は2階だけでの予定でしたが、観客が多く地下でも上映することになり喜ばれました。スタッフの丁寧で温かい対応に感動しました。

1~2ページは読者の協力を得て、今を伝える時勢の論評を抜粋しました。今回は掲載できませんでしたが民主主義の危機を様々な視点で「週刊金曜日」が書いています。是非半年間でも購読しませんか。植村裁判で出会った方たちの文章もあり親近感がわきます。是非お勧めします。(み)

購読料と寄付をありがとうございます(敬称略)
8.7~9.27

成田明 福島清 阿部一子 さかい廣 吉根
由紀子 高橋雋 水野スウ 安川誠二 岡村
雄二 匿名 但馬桂子 高松修二 寺川重憲
文聖姫 計38,000円は印刷と送料に使わせていただきます。

北嶋節子さん、石井一弘さん、上幸雄さんからは著書を寄贈いただきました。合わせてありがとうございます。

郵送費に加え、郵便振替の手数料が大きく値上げし、ミニコミの発行も厳しさが増えています。「パソコンで読む」に切り替える方はお知らせください。紙で読む方は郵便振替「銀河通信」02740-7-56535(年間6号分1,500円)にご協力ください。